

## H-5

### 沖縄語金武方言における格助詞ガ・ヌの分布\*

金城 國夫

別府大学

【要旨】琉球諸語における格助詞の分布や機能を記述した研究は多いが、そのほとんどが主節における格標示パターンを扱っており、統語的環境の変化と格標示パターンの関係を記述した研究は少ない。本研究は、金武方言における主語及び目的語を標示する格助詞ガ・ヌの分布を記述することを目的とし、そのパターンが主節と関係節で異なることを示す。主なポイントは以下の2点である。1. 主語の格標示パターン（ガ・ヌの選択）は基本的に主語の有生性により決定されるが、主節よりも関係節でヌの使用領域が広がる。2. 可能述語文等における目的語のガ・ヌ格標示（主格目的語）は主節では不可能だが、関係節では可能である。

#### 1. 金武方言の概要と本稿の構成

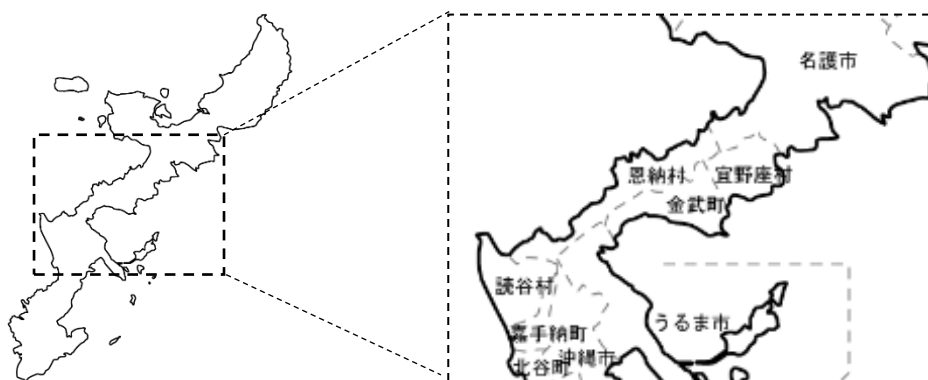


図1 沖縄本島中央部

金武方言は沖縄本島のちょうど中央あたりに位置する金武町で話されている言語である（図1）<sup>1</sup>。沖縄本島の言語は沖縄語（沖縄中南部方言）と国頭語（沖縄北部方言）に分かれ、金武方言は国頭語圏の最南端に属するとする研究が多いが（仲宗根 1987、玉元 2019 他）、仲間（2000）や狩俣（2018）など金武方言の「中南部方言的特徴」を指摘する研究もある。本稿では二つの言語を区別せず、「沖縄語」を沖縄本島で話される方言の総称として用いることにする。

金武方言は日本語や他の琉球諸語と同じく主格・体格言語であり、本稿の分析対象であるガ・ヌは主格と属格の標示に用いられる。本稿ではガ・ヌの主格用法に焦点を当て、その分布を記述する。特に断りがない限り、本稿で用いる金武方言の例文は全て、筆者が2019年から2020年に行ったフィールドワークにより収集されたものである。

沖縄語に共通して見られる主格・体格の特徴として、次のようなものが挙げられ、金武方言もこれらの特徴を有している。

\* 本研究は JSPS 科研費 19K23060 の助成を受けている。インフォーマントとして聞き取り調査に協力していただいた金武町出身・在住男性（昭和 22 年生）及び調査をコーディネートしていただいた金武方言研究者の玉元孝治氏に御礼を申し上げる。

<sup>1</sup> 地図は「白地図専門店」[freemap.jp](http://freemap.jp) により作成。

(1) 沖縄語諸方言に共通する主な格標示パターン

- a. 主格はガまたはヌで標示される。
- b. ガ・ヌの選択は主語の有生性によってなされる。
- c. 体格がゼロ格で標示される。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では(1a), (1b)に関連して、金武方言でも主格標示におけるガ・ヌの選択は主語の有生性に基づいてなされるが、その分布が主節と関係節で異なることを示す。具体的には、主節よりも関係節においてヌの使用領域が広がることを明らかにする。(1c)にあるように、金武方言においても体格は基本的にゼロ格標示であるが、第3節では、可能述語文などにおいて、主格目的語(ガ・ヌ目的語)が従属節に限って可能であることを示す。最後に第4節で本稿の記述をまとめ、今後の課題を論じる。

## 2. ガ・ヌ主語

### 2.1 有生性に基づくガ・ヌ選択—琉球諸語

ガ・ヌによる主格標示と有生性によるガ・ヌの選択は沖縄語に限らず多くの琉球諸語に見られる特徴である(内間・新垣 2000、Shimoji 2010 等参照)。有生性階層(Animacy Hierarchy, Shilverstein 1976)において有生性の高い主語はガ、低い主語はヌで標示され、典型的には親族名称の呼称・非呼称の間にガ・ヌ使用の境界が見られる(内間・新垣 2000: 265, 293、Shimoji 2018)。

(2) 有生性階層とガ・ヌ選択(典型的な場合)

ガ	ヌ
代名詞 > 固有名 > 親族(呼称)	親族(非呼称) > 人間 > 動物 > 無生物

### 2.2 統語環境に基づくガ・ヌ選択—日本語

一方、現代日本語では琉球諸語のガ・ヌに対応する助詞ガ・ヌの選択は主語の有生性ではなく、統語構造によって決定される。主節では主語が常にガで標示され、ヌ標示は不可能であるが、関係節のような連体修飾節ではガ・ヌの両方が可能である。

(3) 太郎が／\*の 歩いた (主節)

(4) 太郎が／の 歩いた 道 (関係節)

ガ・ヌ交替(または主格・属格交替)と呼ばれるこの現象の統語構造的条件に関しては特に生成文法理論の枠組みで盛んに研究されてきた(Harada 1971、Watanabe 1996、Hiraiwa 2005 等)。一方、琉球語においては上述の通りガ・ヌ選択が有生性に基づいてなされるため、統語的環境がガ・ヌ選択に及ぼす影響に関してはほとんど研究されてこなかった。次節では、金武方言のデータを用いて、そのような影響が実際に存在することを明らかにする。

### 2.3 金武方言におけるガ・ヌ選択一有生性と統語環境の影響

金武方言の話者を対象にガ・ヌの選択に関して主節と関係節に分けて調査を行ったところ、表1のような結果が得られた。比較のため、表2に日本語におけるガ・ノの使用領域を合わせて掲載する。(5)(6)は金武方言における主節、関係節の例文である。

表1：金武方言におけるガ・ヌ主格用法の使用領域

		代名詞 1/2人称	代名詞 3人称	固有名	親族 (呼称)	親族 (非呼称)	人間	動物	無生物
主節	ガ								
	ヌ								
関係節	ガ								
	ヌ								

表2：日本語におけるガ・ヌ主格用法の使用領域

		代名詞 1/2人称	代名詞 3人称	固有名	親族 (呼称)	親族 (非呼称)	人間	動物	無生物
主節	ガ								
	ヌ								
関係節	ガ								
	ヌ								

#### (5) 主節<sup>2</sup>

- a.      ari=ga/\*nu      juuban      jiko-ta-n      (3人称代名詞)  
           3.SG=NOM      夕飯(=ACC)      作る-PST-IND  
           「あいつが夕飯を作った」
- b.      uttuu=ga/\*nu      juuban      jiko-ta-n      (親族(非呼称))  
           弟=NOM      夕飯(=ACC)      作る-PST-IND  
           「弟が夕飯を作った」
- c.      duji=ga/nu      juuban      kwaa-ta-n      (人間)  
           友達=NOM      夕飯(=ACC)      作る-PST-IND  
           「友達が夕飯を作った」
- d.      ami=ga/nu      φu-ta-n      (無生物)  
           雨=NOM      降る-PST-IND  
           「雨が降った」

<sup>2</sup> 本稿で使用するグロス一覧

2=second person 2人称、3=third person 3人称、ACC=accusative 体格、AND=adnominal 連体形、GEN=genitive 属格、IND=indicative mood 叙述法、NOM=nominative 主格、NPST=non-past、PST=past 過去、SG=singular 単数



りまた 2008、Kinjo 2012 等)。

- (8) taruu=ja      ʔuranda=nu      ʃimutʃi=∅/\*ga/\*nu      jumi-is-u-n  
 太郎=TOP      英語=GEN      本=ACC/\*NOM      読む-可能-NPST-IND  
 「太郎は英語の本が読める」      (幸喜方言、かりまた 2008:33 より、一部改変)
- (9) taroo=ja      jamatugutʃi=∅/\*ga/\*nu      hanaʃi-uus-u-n  
 太郎=TOP      日本語=ACC/\*NOM      話す-可能-NPST-IND  
 「太郎は英語が話せる」      (那覇方言、Kinjo 2012:220)

### 3.2 金武方言における主格目的語

金武方言においても主節においては、幸喜方言、那覇方言同様に主格目的語は許容されないが、関係節では容認可能となる。

- (10) hanako=ja      eego=∅/\*ga/\*nu      jumii-joos-u-n      主節  
 花子=TOP      英語=ACC/\*NOM      読む-可能-NPST-IND  
 「花子は英語が読める」
- (11) eego=∅/ga/nu      jumii-joos-u-ru      tʃuu      関係節  
 英語=ACC/NOM      読む-可能-NPST-AND      人  
 「英語が読める人」

同様のパターンは-busanu (～したい) という欲求の補助形容詞を伴う構文でも見られる。<sup>3</sup>

- (12) wanu=ja      utʃinaagutʃi=∅/\*ga/\*nu      naree-busanu      主節  
 私=TOP      沖縄語=ACC/\*NOM      習う-したい  
 「私は沖縄語が習いたい」
- (13) utʃinaagutʃi=∅/ga/nu      naree-busanu      tʃuu      関係節  
 沖縄語=ACC/NOM      習う-したい      人  
 「沖縄語が習いたい人」

本節では金武方言において主格目的語の分布においても主節、関係節の間で非対称性が存在すること

<sup>3</sup> 玉元 (2019:91) は他のものを排除して強調する「総記」の用法の場合、平叙文でもガ格目的語が可能であるとしている。

- (i) saki=ga      numi-busanu  
 酒=NOM飲む-したい  
 「(他の飲み物ではなく) 酒が飲みたい」

を示した。次節では本稿の記述をまとめ、今後の課題をまとめる。

#### 4. 終わりに

本稿では、金武方言におけるガ・ヌの分布が主節、関係節という統語環境の違いによって変化することを示した。主格用法のヌの使用領域が主節に比べ関係節で広がる、主節では許されない主格目的語が関係節では許される、という二つの事実を明らかにした。

主格のガ・ヌ選択に関して、筆者が行った予備的調査では、金武方言以外にも、与那原方言や宮古島友利方言などで、同様のパターン（関係節におけるヌの使用領域拡大）が見られた。今後は対象言語を拡大し、琉球諸語におけるこの現象の一般性とその理論的帰結を検証する必要がある。

主格目的語に関してもさらなる比較琉球諸語研究が必要である。また、玉元（2019:91）が記述するように、関係節だけでなく従属節においても主格目的語が容認される場合がある。どのような統語環境において主格目的語が可能なのか、更なる調査が必要である。

#### 参考文献

- Harada, Shin-Ichi (1971). Ga-no conversion and idiolectal variations in Japanese. 『言語研究』 60: 25-38.
- Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of symmetry in syntax: agreement and clausal architecture*. Doctoral Dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, MA.
- かりまたしげひさ (2008) 「沖縄県名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて－ga 格、nu 格、ハダカ格、ja のとりたて形－」 『日本東洋文化論集』 (14)、pp.1-80.
- 狩俣繁久 (2018) 「琉球語研究における系統樹研究の可能性」 (シンポジウム「フィールドワークと文献から見る日琉諸語の傾倒と歴史」発表資料) 2018年12月23日, 国立国語研究所.
- Kinjo, Kunio (2012) Dative subject and nominative object constructions in Naha Ryukyuan. 『日本言語学会第145回大会予稿集』 220-225.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- 仲宗根政善 (1987) 『琉球方言の研究』 東京：新泉社.
- 仲間恵子 (2000) 「沖縄本島北部金武方言－その位置づけ」 『琉球アジア社会文化研究』 3: 72-102.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析－生成文法の方法』 東京：大修館書店.
- Shimoji, Michinori (2010) Ryukyuan languages: An introduction. In Michinori Shimoji and Thomas Pellards (eds.) *An introduction Ryukyuan languages*. Tokyo: ILCAA.
- Shimoji, Michinori. 2018. Information structure, focus, and Focus-Marking Hierarchies. 『言語研究』 154: 88-122.
- Shilverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In R.M.V Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian National University.
- 玉元孝治 (2019) 『金武方言の文法 (草稿) Ver. 3.0』 未出版草稿.
- 内間直仁・新垣公弥子 (2000) 『沖縄北部・南部方言の記述的研究』 風間書房.
- Watanabe, Akira (1996) Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5: 373-410.